

## みこころを知る道(2)

2008.12. 2(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

詩篇 143篇1節、2節

主よ。私の祈りを聞き、私の願いに耳を傾けてください。あなたの真実と義によって、私に答えてください。あなたのしもべをさばきにかけてください。生ける者はだれひとり、あなたの前に義と認められないからです。

詩篇 143篇8節から10節

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。主よ。私を敵から救い出してください。私はあなたの中に、身を隠します。あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神でありますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。

人間は年齢のため、病気のためには死にません。本人のために、また周りの家族ために最善であるから、主は「おいで。来なさい」と天国に呼んでおられるのです。

昨日はちょっと珍しい葬儀でした。みんな大きな声で笑ったのは初めてです。残されている孫六人がみな、証しました。そしてここで歌ったのです。曾孫はちょっと小さくて、歌えませんでしたけれど、途中で声を出したりしたから、やはり楽しかったのでしょう。召されたり姉妹は目が不自由になってしまったので、やがて必ず見えなくなると思って、聖書全体、創世記から黙示録までみことばをテープに全部吹き込んだのです。結局、真理は「聖書だけしかない」と彼女は確信したのだと思います。「みことば」こそ自分にとってすべてのすべてである、と。

今朝、「みことば」を宣べ伝えるご奉仕をしている兄弟から聞いた話です。あるところで、一人の人(ずっと何年間も集会に来てはいるのですが...)が、反発したのです。「人間はそんなに悪くない」と。兄弟は、「でしたら、ローマ書3章を読んだら如何ですか」。「いいえ読みません」。結局、人間は駄目。全然駄目。そして駄目な者にこそ、イエス様が必要なのではないのでしょうか。自分の考えを聖書よりも大切にすると悲劇そのものです。ですから、信じる者にとってもやはり戦いです。大切なのは、自分の考えていることなのか、また自分の思っていることなのか、「聖書は何と言っているか」。いつも選択しなければいけないのです。ある意味で、「自分自身を否定しなければならない」のです。

今、一緒に歌いましたが、「今ぞ告げたまえ。み旨を」。これこそ今、司会の兄弟が読みました詩篇の作者であるダビデの気持ちだったのです。もう一度、10節を読みましょう。

詩篇 143篇10節

**あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。**

自分で分からないから、教えてもらわなければならない。毎日何回も、「教えてください。導いてください」と祈るべきではないでしょうか。

今まで何度もドイツのアイドリゲンまで行きました。あの姉妹会の創設者（私も個人的に知っていました）の姉妹も、目が完全に不自由になりました。何も見えなくなったのです。けれども、素晴らしい姉妹でした。彼女は祈りました。

「私が学び、そして知るようになったことは、『主イエス様との交わりの時間をないがしろにすれば得るものがなく損をするばかりですから、主イエス様の御顔を探さないと...』でした。主の御声を聞こうとしないと、主に対するご奉仕のための能力も装備も失い、主イエス様の御声に対して聞く耳がないと、何をしても余計な時間を必要とし、みこころのままになすことができません。主の御前に静まらないと、落ち着かないし、自分を否定することも不可能です。主の御声を聞こうとしない日は、実を結ばない日です。『主よ。語ってください』と望まないことは、あらゆる不幸の原因です。主イエス様。私はいくら損をしても、大切なことを失っても、ただあなたの御前に静まることだけを望んで、また願っています。主イエス様は、多くのことをしてもらいたいでしょうが、しかし、最も大切なのは『聞く耳を持つ』ことだと思しますので、どうか私を祈りの人にしてください。」

彼女はそのような心構えを持っていましたので、本当に大いに祝福されたのです。結局、「みこころを知らせてください。」

先週、「どうしたら、主のみこころを知ることができるか」という大切な問いについて、一緒に考えました。そして結論から言うと、主のみこころはただ主の御霊、聖霊によってのみ、知ることができるということです。三千年前、すでにダビデは心から祈ったのです。「あなたの霊が、私を導いてくださるように」と。

主のみこころを知りたいと思う者は、御霊に導かれる生活をしていなければなりません。ですから、どうしたら御霊に導かれる生活を送ることができるか、ということを知る必要があります。この間は、二つのことを学びました。

一つは、「みことばを聞く備え」つまり、「主よ。教えてください。」

次は、「みことばに従う備え」です。

教えてください。知るためではなく、従うために。知らなければ、従うことが出来ないからです。このように、主のみこころにかなったダビデは、絶えず思ったのであり、祈り続けました。「教えてください。導いてください」と。

「ダビデの祈り」は、「私たちの祈り」にもならなければならないでしょう。なぜなら、主ご自身が、「ダビデはわたしのこころにかなう者である」と言うことがおできになったからです。私たちも主に喜ばれる者になりたいのではないのでしょうか。主のみこころにかなう者になるためには、どうしても御霊に導かれる生活に入らなければならないのではないのでしょうか。

問題が起こると誰でも助けを求めます。これは、本当は根本的に間違っています。問題になる前に、祈るべきではないのでしょうか。そうすれば、反応は全く違います。結果が現れない場合、私たちは、「どうして主はお答えにならないのか」と思うようになります。結局、みことばを聞き、みことばに従おうという心構えがなければ、いくら祈っても意味のないことなのではないのでしょうか。ですから、今から祈ろうとすることはみこころであるかどうか、確信すべきです。例えば、今日ここに来られた方はみな知っている使徒行伝 16章31節。

使徒の働き 16章31節

**「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」**

親戚も知り合いの人も含まれています。そうすると、このみことばを本気になって信じるなら、「あの人、この人を救ってください」と祈らなくなります。「イエス様。あなたは約束されたから、あなたは嘘つきではないから、気前がいい方だから、嬉しくて嬉しくてしかたがありません。感謝します。期待をもって待っています。」これが信仰の現われです。この信仰がなければ、主は悲しくなられます。

みこころかどうか、それをまず確信して、それから祈るべきなのではないのでしょうか。御座にまで届く祈りをしたいなら、御霊に導かれる祈りをささげなければなりません。大切なのは、祈りよりも祈りの前に、主は何を考えておられるか、何を約束して下さったのかということを知ることなのです。この確信を私たちに与えるのは、もちろん御霊だけです。

前に読んだことがあります、もう一度読みます。ローマ書8章26節、27節。非常に素晴らしいみことばです。初代教会の心構えを表わすことばです。

ローマ人への手紙 8章26節、27節

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

初代教会の人たちは、「私たちはイエス様に出会った。この目で見た」と言わなかったのです。「私たちは相変わらず弱い者です。弱い私たちを御霊が助けてくださいます」。

「私たちは、どのように祈ったらよいか分からない」。幸せな惨めさとも言いましょうか。何を祈ったら良いのかさえ分からないのです。しかし、問題はそうではないのです。分からない私たちのために、「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、とりなしてください」のです。「聖徒」とは、「信じる者」です。

信仰と確信の欠乏は、主のみこころを知らないところからきています。ですから、多くの祈りが聞き届けられないのではないのでしょうか。私たちの主のみこころをはっきり知るまで待ち望み、みこころを知った後、初めて行動するべきであり、感謝するべきなのではないのでしょうか。

導きは、内に住みたもう御霊によってのみ与えられます。そして、この内住の主の導きは、特定のイエス様を信じる者だけに約束されているわけではありません。すべての救われた兄弟姉妹に与えられている特権そのものです。

実際に何かの問題にぶつかった場合、どのように御霊の導きを知っていくか、聖書を見ると、いろいろな点にわけることができるのではないかと思います。

\* 第一番目。御霊の導きを求める場合、すべての物ごとは主の栄光のためである、ということを知らなければなりません。コリント第一の手紙 10 章 31 節です。

コリント人への手紙・第一 10 章 31 節

**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。**

もし、これを深く心に留めているならば、自らの思いや自らの願いは捨て去ってしまう備えがあるはずです。

まことの献身者とは、いったい誰なのでしょう。まことの献身者とは、自分の意思を主に明け渡し、毎日その明け渡しを新たにしている人です。この自らの意志を主にささげた人だけが、御霊に導かれることができます。

イエス様は全く御霊に導かれたお方でした。イエス様が簡単に御霊に導かれた秘密は、詩篇に書かれています。40 篇 8 節です。おもにイエス様に対する予言のことばでもあります。

詩篇 40 篇 8 節

**「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」**

このことばを心から言うことができたのは、イエス様だけではないでしょうか。イエス様のこの心のもちかたこそ、常に御霊に導かれる秘訣です。ですから、イエス様は証しなさいました。ヨハネ伝 8 章 29 節です。

ヨハネの福音書 8 章 29 節

**「わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからです。」**

イエス様だけがおっしゃることのできることばです。もし私たちが、「私たちはいつもみこころにかなうことを行なう」と言うなら、それは嘘か、あるいは盲目にされているかのどちらかです。イエス様だけしかおっしゃることができなかったのです。

けれども御霊に導かれるということは、自分の良い「意思」を捨て、主のみこころだけに従うことを意味しています。これは、決して簡単なことではありません。

全く罪を犯されなかったイエス様でさえ、難しく思われたことです。イエス様は十字架を前にして、ゲッセマネの園で祈られました。よく引用される箇所です。

マタイの福音書 26 章 38 節前半

**「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。」**

マタイの福音書 26 章 39 節

**「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」**

イエス様は、この苦しい祈りを父のみこころを行なうためになさったのです。

イエス様を生んだマリヤという女性の態度も、本当に素晴らしかったのです。ルカ伝 1 章 38 節を見ると、彼女は次のように祈りました。

ルカの福音書 1 章 38 節前半

**「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」**

「私の思いは別にどうでもいい。みこころだけになるように。」マリヤは、自らの意思を主に明け渡したのです。

ルカの福音書 1 章 31 節

**「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」**

ルカの福音書 1 章 34 節、35 節

そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私

はまだ男の人を知りませんが。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」

そして、

ルカの福音書 1章38節

マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。

マリヤには、イエス様の母になる心の備えがありました。もし、結婚する前に身ごもるなら、掟では石で打ち殺されなければならなかったのです。その危険も顧みないで、ただみこころをなさせたまえ、とマリヤは主にすべてを明け渡しました。「私は主のはしためです。あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

主のみ栄えが第一の場所を占めていなければなりません。この態度を持つ人々に与えられた信仰は本当に豊かです。私たちも、イエス様やマリヤのような献身者なのでしょうか。

パウロも、そのよう人でした。

エペソ人への手紙 6章6節、7節

人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。

そのような者になりたいと、パウロは心から思ったのです。

主に聞き従い、己を捨てる備えのある人は、御霊の導きを受ける資格のある人です。若い兄弟姉妹は、結婚の相手を考える時にも、「主よ。私はあの兄弟、あの姉妹を好きになりました。けれどみこころでなければ、相手への思いを断ち切ります」と、このような主に従う態度がどうしても必要なのではないのでしょうか。

私たちの心の態度が、主の栄光、主のみ栄えを第一にしているならば、主は私たちを豊かに導くことができになるのです。御霊の導きを求める場合、すべての物ごとが主のご栄光のためであるということを知らなければなりません。

\* 第二番目。主の導きは、いつもみことばにのっとっています。非常に大切な点なのではないかと思えます。

御霊の導きは、いつも必ず主のみことばである聖書に基づいています。したがって聖書の知識は、私たちにとって本当に大切なことと言わなければなりません。言うまでもなく、救われるためではありません。救われてから主に用いられる器となるために必要です。

みことばを大切にしないと、みこころを知ることができません。みこころを知らなければ、従うことができません。

ホセアという預言者は、非常に苦しんだ男でした。彼は、4章6節を見ると、当時の、主の恵みによってエジプトから解放されたイスラエルの民、救われた人々に、次のように言わざるを得なかったのです。

ホセア書 4章6節前半

**わたしの民は知識がないので滅ぼされる。**

と主は嘆いておられたのです。

また、ソロモンは、箴言の中に次のように書いたのです。

箴言 19篇2節

**熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はつまずく。**

とあります。イエス様はよく、当時の聖書学者たちをおしかりになったのです。どのようなことばでおしかりになったかと言いますと、「読んだことがないのですか」。聖書の知識のないことをイエス様は非難されました。例えば、マタイ伝12章を見ても、次のように書かれています。

マタイの福音書 12章3節

**しかし、イエスは言われた。「ダビデとその連れの者たちが、ひもじかったときに、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。」**

もちろん知っていたはずです。読んだのです。けれども、真剣に考えようとしなかったし、自分のものにしようとしなかったのです。同じくマタイ伝19章4節。

マタイの福音書 19章4節、5節

**イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。」**

聖書を読まず、飢え渴きを持って従おうという心構えがない人は、御霊の導きを待っていても何の役にも立ちません。迷いに導かれるばかりです。また、22章を見ても分かります。イエス様は聖書学者たちに言われました。22章29節。

マタイの福音書 22章29節

**「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。」**

結局、彼らは聖書を勉強しただけなのです。知識を得るためでした。へりくだろうとしなかったのです。自分の意志を捨てようとしませんでした。結局、みことばは本当の意味

で何であるかと知りたくなかったのが、当時の聖書学者たちの態度でした。

主のみことばに逆らう者に御霊の導きがないのは言うまでもありません。もしただ一つのみことばに、それを知りながら従わないなら、どんなに祈っても導きは与えられません。

主のみことばに逆らうということは、主の御霊に逆らうことです。したがって、そのような人には尊い導きが与えられません。

主は私たちに、みことばを確かに学ぶように勧めておられます。旧約聖書の一箇所を見てください。申命記 17 章になります。

申命記 17 章 19 節

**自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。**

似ている箇所は沢山あります。例えばイザヤ書 34 章 16 節。内容的には全く同じことばです。

イザヤ書 34 章 16 節

**主の書物を調べて読め。これらのもののうちどれも失われていない。それぞれ自分の連れ合いを欠くものはいない。それは主の口がこれを命じ、主の御霊が、これらを集めたからである。**

とあります。またイエス様は、聖書学者であるパリサイ人たちに厳しいことばを言われたことがあります。ヨハネ伝 5 章 39 節。

ヨハネの福音書 5 章 39 節

**「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」**

「聖書の中に永遠のいのちがあると思うので」、確かにそうなのです。聖書の中心は一つの教えではありません。約束された救い主、実際にこの世に来られた救い主、十字架の上で犠牲になられたイエス様、復活なさり、昇天なさったイエス様、今日も支配しておられるイエス様です。また、近いうちに迎えに来られる主イエス様です。

使徒行伝 17 章の中に、次のように書いてあります。

使徒の働き 17 章 11 節

**ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。**

パウロは人をあまり褒めなかったのです。「みな嘘つき。みな使いものにならない。ゼロ以下だ」。彼は旧約聖書の箇所を引用してそのように人間について言ったのですが、ここで珍しく「彼らは良い人たちだった」と。どうして良い人たちだったかと言いますと、「あの

パウロの言っていることは本当だろうか。嘘だったら困る」。惑わされないように、時々ではなく、自分で、「毎日聖書を調べた」と。パウロはそれが分かったとき、嬉しくなりました。有り難い！と。

ですから、人間は何と言っているかは別にどうでも良いのです。「聖書は何と言っているか」です。集会で出版している本が沢山あるでしょう。けれど、いつも良いものとは言えません。たいしたものではありませんが、その中に引用されているみことばは素晴らしいです。それだけを大切にすれば、非常に嬉しくなり、解放されます。導かれます。祝福されます。本当に聖書は、「すべてのすべて」です。もし、みことばが私たちの喜びとなり、楽しみとなり、いのちとなるなら、しめたものです。

ダビデは、一番長い詩篇を書いた人です。詩篇 119 篇全部で 176 節です。一度に読まないほうが良いですね。三節だけ読みましょう。

詩篇 119 篇 72 節

**あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。**

最高の宝物です。

詩篇 119 篇 97 節

**どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。**

結局、自分の思っていること、考えていることは大切ではない。「みことばは何と言っているか」なのです。

詩篇 119 篇 140 節

**あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。**

読まなくてはならないのではありません。大好きな、私のすべてであるからです。

しかし、ある人は言うかもしれません。「イエス様を愛している」と。けれど、聖書を愛さない人は、イエス様を愛することができません。無理です。イエス様のお名前の一つは、「神のことば」でしょう。離れられません。

エレミヤは、確かにいろいろなことで悩みました。けれど、悩みながら喜ぶことができました。どうしてでしょう。やはり、みことばのおかげでした。

エレミヤ記 15 章 16 節前半

**私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。**

食べることは、分かることではありません。理解することでもありません。納得する

ことでもありません。自分のものにする事です。「書かれている。私のために書かれている」。この素直な態度をとる事です。みことばがなかったなら、エレミヤはつぶれてしまったことでしょう。みことばが、彼の力、支えとなったのです。

私たちの信仰生活はみことばを食べるはかりにしたがって、程度にしたがって、成長します。いのちのパンである「イエス様ご自身」が、私たちの食べ物とならなければいけませんし、またイエス様はそうなりたく、私たちの心の奥底に入ることを願っておられます。

いったいどうしたら、イエス様をよりよく知ることができるのでしょうか。みことばによってのみです。聖書、即ち主のみことばは、単なる教理、学説を述べているのではなく、イエス様の啓示の書物そのものです。読むために大切なことは、イエス様をよりよく知りたい、そのような心構えを持つべきなのです。

イエス様は、パリサイ人たちに、「あなたがたは聖書の中を調べているが、みことばを食べることを欲せず、いのちを受けようとしない」と言われたのです。聖書を読むことと、いのちを得ることは一つのことであり、決して二つのものではありません。

主はみことばをもってご自身をお現わしになります。主のみことばは、私たちにとっていのちのパンとならなければいけないはずです。なぜなら、聖書は教理や真理の原則を語っているよりも、いのちのパンそのものであるからです。

みことばは、私たちにとっていったいどのようなものなのでしょうか。いのちのない冷たい餅に過ぎないのでしょうか。「重荷」となっているのでしょうか。あるいは、「いのち」となっているのでしょうか。

もし生けるみことばが私たちの内に入るのなら、その必然的な結果として、「いのち」が訪れます。理解力をもってしては、決して「いのち」は訪れてまいりません。

もし、聖書が私たちにとって単なる掟であり、単なる倫理であるなら、それは私たちにとって「重荷」であり、不自由なものです。けれど、「いのち」なら、自由と喜びをもたらすものとなるに違いありません。

了